

サン・ヴィクトールのリカルドゥスの思想における愛

中 村 秀 樹

サン・ヴィクトールのリカルドゥス (†1173) は、多様な主題について思索を展開しており、その著作が扱う領域は哲学と人文的教養から聖書読解、教義上の諸問題、観想論、さらに愛の人間論へ及んでいる。だが現代の研究は『三位一体論 *De Trinitate*』を扱うものと、観想 *contemplatio* についての理論を究明したものとはほぼ集中しているため¹⁾、リカルドゥス研究においては思想の全体像の解明が重要な課題となっている²⁾。確かに彼が思惟の方法論について論じることは希なので、その広範な著作領域は読者に対して一見相互の連関が理解し難いものとしてあらわれてくる。しかし著作を詳細に検討するならば、それらの領域を相互に関連付ける言明が見出されるのであり、それらの言明の総合的検討は彼の神学を貫いている根本的な関心を明らかにする。それは愛による人間の完成である³⁾。

現代の研究がリカルドゥスの神学全体を貫く関心に気づかず、思想の全体像を捉えることに困難を覚えた理由は、様々な領域を相互に関連付ける言明が含まれる著作『観想への魂の準備——小ベニヤミン—— *De praeparatione animi ad contemplationem, liber dictus Benjamin minor*』

1) 神学的関心からの研究史については MARIA DOMENICA MELONE: *Lo Spirito Santo nel De Trinitate di Riccardo di San Vittore* (Studia Antoniana 45), Roma 2001, pp. 8-11 を参照。

2) 観想論を愛の人間論との関連で考察し、思想全体の枠組みを解明した研究として HIDEKI NAKAMURA: «*Divinum quemdam affectum induit*» Zum Verhältnis zwischen *contemplatio* und *caritas* bei Richard von St. Viktor, in: *Mediaevalia. Textos e estudos*. Vol. 23. *Intellect et imagination dans la Philosophie Médiévale*, vol. IV, éd. par MARIA CÂNDIDA PACHECO, JOSÉ F. MEIRINHOS, Porto 2004, pp. 397-409 を参照。

3) 人間論を中心的視点としてリカルドゥスの思想を包括的に扱う研究として HIDEKI NAKAMURA: *Amor invisibilium. Die Liebe im Denken Richards von Sankt Viktor (†1173)* (Corpus Victorinum, Instrumenta 6), Münster 2011 (ca. 580 Seiten) が出版準備中である。

(以下『小ベニヤミン』と略)の評価にあらわれている⁴⁾。この著作は、別の著作『観想について——大ベニヤミン——*De contemplatione, seu Benjamin maior*⁵⁾』(以下『大ベニヤミン』と略)の主題である観想の準備段階を扱うに過ぎないものとして、その通称『小ベニヤミン』のごとく「小さいもの」と見なされてきた。だが『小ベニヤミン』は中世の受容史では彼の著作中最も多く読まれたものであり、すでに十二世紀末から当時としても異例の勢いで筆写され、実に多くの修道院の書庫に収められていた⁶⁾。この中世の受容の在り方はリカルドゥスを読み解く鍵が『小ベニヤミン』にあることを示している。そこで本稿では『小ベニヤミン』の分析を基盤として、リカルドゥスの思想の根本的な問題関心と、それによって貫かれた神学の全体像を示すこととしたい。

1 愛による認識の構成

『小ベニヤミン』において、リカルドゥスは「創世記」第二十五章以降に書かれたヤコブの家族の物語を霊的に読解することを通して、観想の前提条件が整えられてゆく段階を考察する。ヤコブの家族の物語の霊的読解に関しては教父思想に長い伝統があるが、リカルドゥスはこのテキストを人間が神との関係性の中で完成されてゆく過程として解釈する⁷⁾。その解釈によればヤコブは人間を、彼の二人の妻レアとラケルは各々精神的存在者としての人間の根源的の二側面である情動 affectus と理

4) RICHARD DE SAINT-VICTOR: *Les douze patriarches ou Benjamin minor*. Texte critique et traduction par JEAN CHÂTILLON et MONIQUE DUCHET-SUCHAUX. Introduction, notes et index par JEAN LONGÈRE (Sources Chrétiennes 419), Paris 1997. (以下 *BMI* と表記) この著作の詳細な構造分析として HIDEKI NAKAMURA: *Schriftauslegung und Theologie bei Richard von Sankt Viktor*, in: RAINER BERNDT (hg.): *Bibel und Exegese in der Abtei Saint-Victor zu Paris*. Form und Funktion eines Grundtextes im europäischen Rahmen (Corpus Victorinum. Instrumenta 3), Münster 2009, pp. 363-389. を参照。

5) RICHARDUS DE SANCTO VICTORE: *Benjamin maior*, ed. MARC-AEILKO ARIS: *Contemplatio. Philosophische Studien zum Traktat Benjamin Maior des Richard von St. Victor*. Mit einer verbesserten Edition des Textes (Fuldaer Studien 6), Frankfurt am Main 1996, pp. [1]-[148]. (以下 *BMA* と表記)

6) この著作の特異な写本伝承状況について RUDOLF GOY: *Die handschriftliche Überlieferung der Werke Richards von St. Viktor im Mittelalter* (Bibliotheca Victorina 13), Turnhout 2005, p. 309 を参照。

7) この物語の解釈史については *Benjamin minor* 校訂版の Longère による解説を参照: *BMI*, pp. 19-39.

性 ratio を示している⁸⁾。ヤコブが二人の妻と共に家庭を築いてゆくことは、愛と認識の協働の内に人間が神へと歩む道として解釈される。すなわちヤコブの十三人の子供たちの内、レアと彼女の侍女ジルバが生む九人の子は人間の様々な情動能力の完成態を⁹⁾、ラケルと彼女の侍女ビルハが生む四人の子は理性的な認識能力の完成態を象徴しているのである¹⁰⁾。

ここでリカルドゥスは、人間の観想への歩みをその過程的展開に即して現象として描写しているわけではない。むしろ問われているのは、人間がそれによってこの歩みを可能とされる諸要件である。その際ある要件の成立はさらに高次の要件の成立を可能にし、その相互に秩序付けられた段階性の展開に従って、より高次の精神的働きが可能とされてゆく。それ故リカルドゥスは、諸要件の成立を子の誕生に喩えるのである。ヤコブの妻たちが各々必要な条件が満たされると子を産むように、情動と理性という二つの能力がこれらの諸要件を獲得してゆくことは、人間が神との関係性においてそのつど高次の段階に入ることを意味している。

さてリカルドゥスは、人間がどのように神との関わりに目覚め、そこへ招き入れられるのかを、レアがヤコブの第一子として産むルベンについての解釈によって示す。ルベンの誕生は、人間が自己の現実を神との関係において見据え、整え始めることを象徴している。人間は自らの行為者としての不完全さに目を向け、それに由来する罪過と自己における善の欠如に気づく時、神の絶対的善さの前に畏れ *timor* を覚えるようになる。この畏れは、人間が自らの不完全さについて持つ認識と、神の完全な善さについて与えられる洞察とに基礎付けられている。ここで人間の自己認識と神認識は、共に萌芽的段階にあるにもかかわらず、情動を神へと秩序付け始める。畏れは、人間の情動が神との自覚的關係性の内に秩序付けられた第一の姿であり、情動は畏れを基点に徳 *virtus* として、つまり人間がそれを通して神へ向かう力として形成され始めるのである¹¹⁾。

8) *BMI*, 3, pp. 94-98.

9) *BMI*, 7, pp. 108-110.

10) *BMI*, 14, pp. 126-128; 67, pp. 282-284; 71, pp. 294-296.

11) *BMI*, 8, pp. 110-112.

神へと向かう第一の徳は、情動の側において形成される。ヤコブの最初の四人の子はレアから生まれるように、人間の神への歩みにおいてはまず情動が整えられなければならない。この点にリカルドゥスの神学の特徴があらわれている。彼の観想論が目指すのは、自然神学的な探求が一般的に到達し得る認識ではなく、神が人間にとって「誰であるのか」を身をもって、全情動をもって人格的に知ることである。このような全人格の神認識に至るために人間精神はその能力を研ぎ澄まさないが、それはまず情動が整えられることを通して、徳としての情動の力に導かれて可能となる。神へと向かう人間の認識は、世界内の有限的価値へ執着する情動の乱れによって何よりも妨げられるからである¹²⁾。

それ故、人間にとって重要なのは、畏れの徳の形成に始まった情動の神への秩序付けがその総体へと及ぶことである。この重要な段階は、レアがヤコブの第二子から第四子までを産む過程によって象徴される。神の前で自らの不完全さと罪過を真に認め、畏れを持つ者は、深い苦悶 *dolor* へと導かれる。この苦悶は自己の現実についての真の悲嘆と痛悔を意味している。これが第二子シメオンが象徴する第二の徳としての苦悶である¹³⁾。このように神の前で真に痛悔し苦悶する者に次に可能とされるのは、神によって与えられる赦しへと希望 *spes* を向けることである。ここに第三子レビが象徴する第三の徳が形成される¹⁴⁾。この希望の徳において人間の情動は神への方向付けを強めているが、その根拠は自らの罪過を痛悔する人間を、神の霊が訪れ、赦しへの信頼を与えることにある。そこで希望の徳において人間と神との関わりは相互性を深めてゆき、両者の間には親愛 *amicitia* が結ばれ始める¹⁵⁾。この親愛の中で人間は深い喜びに満たされ、その情動は神との関わりにおいて決定的な姿を取り始める。第四子ユダが象徴する第四の徳である愛 *amor* が生まれるのである¹⁶⁾。この愛の徳において人間は自らが愛する神を余すところなく肯認し、賛美する¹⁷⁾。愛の徳によって人間は、その情動の総体にお

12) *BMA*, 3, 1, pp. [55]-[56].

13) *BMI*, 9, pp. 112-114.

14) *BMI*, 10, pp. 114-116.

15) *BMI*, 11, p. 116.

16) *BMI*, 11, p. 118.

17) *BMI*, 12, pp. 122-124.

いて根源的に神へと秩序付けられるのである。それ故、愛は人間に真の神認識へと歩み出すことを可能にする。人間は愛によって愛した者へと完全に惹き付けられ、愛は愛した者を余すところなく知るように人間を内的に駆り立てるからである。「ユダによって私たちは……神への愛……以外の何を理解するのか。それ故ユダが生まれると不可視の諸善への願望が起き、それが熱くなるとラケルが後裔を求める愛によって燃え立ち始める。彼女が知ることを欲し始めるからだ。愛のあるところには眼がある。私たちは大きな情熱をもって愛する相手を喜んで見つめるのである¹⁸⁾。」

ここで愛は神へと向かう人間認識の構造原理として自らをあらわしている。愛が認識の力を高めるという考えは親和性による認識の理論としてしばしば見出されるが、リカルドゥスにおいてはその認識論的枠組みが一貫してこの考え方によって構成されている点に特徴がある。彼は人間の認識を——ポエティウスの概念的区分を援用して——三つの遂行様式に区分し、その各々に現実化の中心となる認識能力を割り当てる。最低次の認識様式である思い巡らし *cogitatio* は表象力 *imaginatio* を、中間的認識様式である黙想 *meditatio* は理性 *ratio* を、そして最高次の認識様式である観想は知性 *intelligentia* を各々その中心的遂行能力とする。これらの三種の認識様式はその遂行能力に応じて対象領域を規定され、相互の協働性を保持しつつ段階的に秩序付けられるのである¹⁹⁾。

だがこれら三種の認識様式がそもそも区別される根拠は、その中心的遂行能力の特質に基づく区分にではなく、これらの様式がどのように秩序付けられた愛の徳の影響の下にあるかという点にある²⁰⁾。最低次の認識様式である思い巡らしは、表象力の固有対象である可感的なもの *sensibilia* の認識にのみ関わることができるが²¹⁾、それはこの認識様式

18) *BMI*, 13, p. 126: Sed quid aliud per Iudam intelligimus nisi ... amorem Dei. ...? Nato itaque Iuda, id est, bonorum invisibilium desiderio exsurgente atque fervente, incipit Rachel amore prolis aestuare, quia incipit velle cognoscere. Ubi amor, ibi oculus; libenter aspicimus, quem multum diligimus.

19) *BMA*, 1, 3, p. [8].

20) Aris は観想論を認識論的観点から詳細に研究したが、この点に気づいておらず、そのため三種の認識の道がそれによって区別される根拠を見出せていない。前掲 MARC-AEILKO ARIS: *Contemplatio*, pp. 48-55; p. 49, n. 281 を参照。

が愛による認識の構成へと組み込まれていないからである。つまり思い巡らしに対しては認識が本来向かうべき方向性が示されておらず、そのため思い巡らしは可感的な有限的存在者の間に留まり、そこで彷徨う他はないのである²²⁾。これに対して黙想は愛の徳が形成されてはじめて可能となる遂行様式である。黙想は、その愛による構成に基づき可感的な領域を超えてリカルドゥスが不可視のもの *invisibilia* と呼ぶ霊的な領域をその対象とすることができる²³⁾。愛がそこへと向かっているものを黙想はその対象とするのである。

2 黙想：愛による精神の上昇

リカルドゥスは、この愛によって構成され、愛の対象である神へと導かれる黙想における人間精神の動きを神への霊的な上昇として描写する²⁴⁾。この霊的上昇において愛と認識は相互に補完しつつ働く。一方では愛された者をより深く知るにつれて認識者の愛はいつそう強まり、他方でそのように強められた愛は、愛された者をさらに深く認識することへと認識者を内的に駆り立てる。愛によって構成され、愛と共に働きながら、愛が目指しているものをより深く知ろうとする働きとしての黙想は、もはや単なる認識の遂行様式というよりは、むしろ愛する者が愛された者へ向かう全人格的営みである。それ故、黙想においては、神と人間の間にある愛の在り方を反省的に捉え直すことが重要となるが、それは理性の自然的能力によって為され得ることではない。まず捉えなければならぬのは、すでに歴史の中で人間には思いもよらない仕方であらざる示された神自身の愛である。この愛について知るためには聖書に向かわなければならない。黙想における霊的上昇は、理性的認識の及ばない神の愛の在り方を知らしめる聖書の読解によってはじめて可能となるのである。

リカルドゥスは、サン・ヴィクトールのフーゴの聖書読解理論を受け継ぎ、特に霊的読解の領域において豊かに展開した²⁵⁾。その際、読解

21) *BMI*, 7, p. [14].

22) *BMA*, 1, 3, p. [8].

23) *BMA*, 1, 7, p. [14]; cf. Rom. 1: 20.

24) *BMI*, 14, pp. 126-128.

が靈的に為されるとは、字義的には世界内的な事象を描写したテキストが、神的な現実を指し示すものとして読み解かれることを意味している。ここでその理解が目指される神的な現実とは、キリストにおいて成就した神の愛による人間の救済である。それ故、聖書の靈的読解は、キリストによる救済の真理を明示している新約聖書においてよりも、それを暗示的に告げ知らせる旧約聖書の読解において重要な課題となる²⁵⁾。また救いについて明瞭に証しをする新約聖書において、より深い洞察を得るために靈的読解が為されることは可能であるが、それが誤った解釈にならないためには規範を与える方向性が必要である。この方向性は愛によって与えられる。聖書を靈的に読解することは、黙想において認識を導く神への愛があってはじめて可能となる。愛は、人間の精神の目を愛された者の現実に対して開き、それを深く理解することを可能にする。神への愛がなければ聖書を靈的に読解することはできないのである。

リカルドゥスは、フーゴーに従い四種の聖書読解法を認める。すなわち字義的・歴史の意味を求める読解（ヒストリア *historia*）を基礎に置き、靈的な読解として比喩の意味を求める読解（アレゴリア *allegoria*）、倫理の意味を求める読解（トロポロギア *tropologia*）、終末の意味を求める読解（アナゴギア *anagogia*）の三種を挙げている。アレゴリアにおいては、神が人間の救済のために為した業それ自体について、より深い理解が探求される。トロポロギアは、アレゴリアによって深められた信仰理解に基づき、信仰者としての生を導き得る靈的洞察を得て、それを実践することを目指す。アナゴギアは、人間が最終的に希望し得る終末の事柄についての深い洞察を求めようとするのである²⁷⁾。

これら三種の靈的読解法のなかで、リカルドゥスはトロポロギアをと

25) フーゴーの聖書読解理論は *Didascalicon de studio legendi*, A Critical Text, ed. CHARLES HENRY BUTTIMER, Washington D. C. 1939 (以下 HUGO: *Didascalicon* と表記) の第五巻に展開されている。サン・ヴィクトール学派の聖書読解理論の全体像についての最新の包括的研究として上掲 RAINER BERNDT (hg): *Bibel und Exegese in der Abtei Saint-Victor zu Paris*. Form und Funktion eines Grundtextes im europäischen Rahmen (Corpus Victorinum, Instrumenta 3), Münster 2009 を参照。

26) HUGO: *Didascalicon*, 6, 6, p. 123.

27) 詳細な分析は上掲 HIDEKI NAKAMURA: *Schriftauslegung und Theologie bei Richard von Sankt Viktor*, pp. 364-371 を参照。

りわけ重要なものと見なし、自ら実践している。観想論に関する二つの主著のうち、『小ベニヤミン』はヤコブの家族の物語のトロポロギア的読解であり、そこで読者が得る洞察は観想への準備段階としての諸徳の形成のために読者自身に適用されるべきものである。また『大ベニヤミン』は「出エジプト記」第二十五章の契約の箱についての描写をやはりトロポロギアとして読解したものであり、読者は箱の製作と設置の在り方についての指示を、観想の在り方を示す教えとして自らに適用するよう求められる。リカルドゥスが、その神学の枠組みをなす観想論をトロポロギアによって提示することは、彼の神学が目指すものの特徴を示している。トロポロギアにおいて得られる倫理的洞察は、一般的に理性によって獲得可能な知ではなく、ヒストリアに基づきアレゴリアによって深められた信仰理解、すなわち神による人間の救済がどの様に為されたのかについての洞察を前提としている。それ故、トロポロギアは聖書読解者に対し、彼自身が神から救済の業において与えられた愛に応えるよう促す。トロポロギアは、神の愛に応えようとする人間に対して、愛される者 *dilectus* である神の意志にどの様に従えばよいかを示す霊的洞察なのである。「我々は聖書の隠れた深みから新たな認識を汲み取る度に、愛する人の使者をもてなしているに他ならないのではないか。……しばしば起こることだが、一つの同一の聖書が多様な仕方で読解され、一つの言葉の中で多くのことが我々に告げられる。すなわち聖書は、愛された者が我々によって為されるのを望んでいるのは何かを倫理的に我々に教える……²⁸⁾。」

さてこのように愛された者をより深く知る道である黙想が深まる過程の特徴は、愛と認識の相互の補完的働きが徐々に完全性を獲得してゆくことにある。レアが第四子ユダを産んだのを見てラケルが子を熱望する

28) *BMA*, 4, 14, p. [104]: Quoties ex abditis Scripturarum recessibus novos intellectus eruimus, quid aliud quam quosdam dilecti nostri nuntios excipimus? ... Et saepe fit ut una eademque Scriptura, dum multipliciter exponitur, multa nobis in unum loquatur, moraliter nos docens quid dilectus noster facere nos velit. リカルドゥスについての最新の研究書の一つである DALE M. COULTER: *Per Visibilia ad Invisibilia*. Theological Method in Richard of St. Victor (d. 1173) (Bibliotheca Victorina 19), Tornhout 2006 は聖書読解理論を詳細に分析しているが、トロポロギアにおける愛の中心的役割を十分に主題化できていない。Cf. op. cit., p. 65ff.

が自分では産めず侍女ビルハにダンとナフタリを産ませた様に、理性の下にある表象能力が可感的対象領域にとどまることを止め、上位の精神的認識能力との協働によって、神的な現実への霊的上昇を遂行し始める。この霊的上昇が進むにつれて神的な事柄についての認識が深まると、人間はその観点から有限的世界の現実を見るようになる。この有限性へのより深い洞察は、愛がさらに愛された者へ向けて整えられるのを助けるのである²⁹⁾。それ故ダンとナフタリの誕生の後、今度はレアの侍女ジルバがガドとアセルを産む様に、人間的情動の下位の部分にある二つの傾向性が、神への愛のもとに徳として形成される。身体的快を求める傾向は節制 *abstinentia* の徳として、身体的苦しみを避けようとする傾向は忍耐 *patientia* の徳として整えられるのである³⁰⁾。こうして世界内の有限的価値に執着する下位の情動が整えられることは、愛をさらに堅固なものとする。レア自身が再びイサカル、ゼブルン、ディナを産む様に、人間には真の喜び *gaudium*、悪徳への憎しみ *odium vitiorum*、そして真の羞恥 *pudor* が徳として与えられる³¹⁾。人間は、神への愛が深まり悪徳を真に嫌悪するに至って、自らがいまだ悪徳に陥る可能性を払拭できない不完全な存在であることをはじめて真に恥じるようになる。それ故、真の羞恥が産まれることで情動の側での徳の形成は完成するが、それは人間に欲求者としての自己の全体を経験させ、十全な自己認識を可能にする。ラケルがヤコブの十二番目の子であるヨセフを産む様に、識別力 *discretio* が与えられ、これによって人間の情動、すなわち愛の全体は、神へ向けて秩序付けられるだけでなく、相互に統制されることで徳としての在り方を保つことができるようになるのである³²⁾。

3 観想：愛による認識の完成

愛する者としての人間の自己認識は、愛された者との関係性を振り返るものであるので、人間は自らの原像である神との関係性の内に、似像である自己自身の在り方を徐々に深く見抜いてゆくことになる³³⁾。この

29) *BMI*, 14-24, pp. 126-156.

30) *BMI*, 25-35, pp. 156-188.

31) *BMI*, 36-65, pp. 188-280.

32) *BMI*, 66-72, pp. 280-298.

ように自己認識が神認識との補完性の内に十全なものとなる時に、黙想は最高次の精神の遂行様式としての観想へと移行することが可能となる³⁴⁾。観想者は、自らがその根底から神への愛によって構成され、導かれていることを深く自覚しつつ愛の内にすべての認識を遂行する。観想は、その最も豊かな実りを自らの構成根拠である愛がそこへと向かう神を対象とする時に得るが、他の被造的存在者をその認識対象とすることもできる。観想は対象領域によってではなく、その遂行が全き仕方ですべての愛の影響の下にあることによって特徴付けられる。観想が有限的存在者へと向かう場合、観想者はその全てを愛によって創造した神との関係性の内に観ることを通して、それらの被造性の本質を見抜く。これが観想を他の認識様式から決定的に区別する点であり、観想者はもはや被造物への歪んだ執着なしに、全く自由な眼差しをもってそれらの積極的価値を捉えるのである³⁵⁾。

観想は、そこで表象力、理性、知性という三つの認識能力がどのように協働するかという点から六種類に区分される³⁶⁾。その際、或る能力を中心にした協働の仕方に応じて、各種類に対象領域が規定される。第一種（表象力のみ）は可感的なもの、第二種（表象力と理性：以下、中心能力に下線）は可感的なものの秩序、根拠、目的、第三種（表象力と理性）は非可感的なもの、第四種（理性と知性）は人間精神、第五種（理性と知性）は神の本質一般、第六種（知性のみ）は三位一体を対象とする³⁷⁾。

さて観想が神へと向かう第五種、第六種においては、恩寵が与えられるならば、観想者は脱我 extasis へと導かれ得る³⁸⁾。脱我においては記

33) RICHARDUS DE SANCTO VICTORE: *De eruditione hominis interioris*, 2, 47, PL 196, 1344B-1344C. 自己認識のリカルドゥスの思想全体における位置付けと意味について HIDEKI NAKAMURA: *Cognitio sui* bei Richard von St. Viktor, in: RAINER BERNDT, MATTHIAS LUTZ-BACHMANN und RALF M. W. STAMMBERGER zusammen mit ALEXANDER FIDORA und ANDREAS NIEDERBERGER (Hgg.): *"Scientia" und "Disciplina"*. Wissenstheorie und Wissenschaftspraxis im 12. und 13. Jahrhundert (Erudiri Sapientia 3), Berlin 2002, pp. 127-156. を参照。

34) *BMI*, 87, pp. 342-346.

35) *BMA*, 1, 3, p. [25].

36) *BMA*, 1, 6, p. [12].

37) *BMA*, 1, 6, pp. [12]-[14].

憶、感覺的認識、そして理性的認識そのものが奪い取られる。「精神が自己自身を超えて *supra semetipsum* 奪い取られることによって天上の事柄へと高められる時、その時身体的感覚が奪い取られ、その時外的な事物の記憶が奪い取られ、その時人間の理性が奪い取られる³⁹⁾。」脱我において、人間がそこから奪い取られ、それを離れ去るのは、彼の理性的認識主体としての在り方、すなわち「我」そのものである。「精神は……自己自身をまったく忘れ、脱我へと上げられ、高みへと完全に奪い取られる⁴⁰⁾」。

脱我において、観想者は、理性的な認識主体としての「自己」から奪い取られているので、彼が保つ人格的同一性は、もはや通常人間の意識的主体性を形作る理性的認識の領域の内ではなく、人間的精神のもう一つの根源的領域である愛の内にある。脱私の観想の前、その間、そしてその後人間が保つ人格的同一性は、愛する者へと向かう愛の力に依っている。リカルドゥスは、観想者が脱私の内に観られた者を脱我から戻った後に臙げに想起する可能性を認めるが、それはこの靈的経験において保たれた「愛する者」としての人格的同一性に基づいているのである⁴¹⁾。

『大ベニヤミン』第五巻においては、脱私が神への愛によってどの様に原因されるかが解明されるが、その基本構造は認識の力の弱さとそれに原因する停滞を、愛の力の大きさが耐えることができなくなり、溢れ出てゆくという点にある⁴²⁾。認識が行くことのできないところへ愛は行こうとするのである。この人間の神へ向けての自己超越を導き得るのは愛のみである。すでに観想を構成した愛は、さらにその最高段階において愛する者である人間が神自身へ向けて奪い去られることを可能にする。

38) *BMA*, 4, 22, p. [118].

39) *BMI*, 82, p. 326: *Ibi enim sensus corporeus, ibi exteriorum memoria, ibi ratio humana intercipitur, ubi mens supra semetipsam rapta in superna elevatur.*

40) *BMA*, 5, 7, p. [119]: *... spiritus ... sique penitus oblitus et in extasi sublevatus totus in superiora rapiatur.*

41) 脱我における記憶の在り方についての詳細は HIDEKI NAKAMURA: „*Memoria*” im Denken Richards von Sankt Viktor, in: URSULA VONES-LIEBENSTEIN (Hg.): *Wider das Vergessen und für das Seelenheil*. Memoria und Totengedenken im Mittelalter (Corpus Victorinum, Instrumenta 5), Münster 2010 (im Druck) を参照。

42) *BMA*, 5, 5-17, pp. [129]-[146].

リカルドゥスは、脱我の中で人間が愛の内に神へと奪い去られる在り方を、「神の中へと超えていく transit in Deum」と表現する⁴³⁾。人間が神の中へと超えていくという事態は、神と人間の間にあって、これら愛する者同士を合一する力である愛によってのみ引き起こされる。この神自身との愛における合一 unio において、人間は自らが愛する者を観るのである。したがって、この観ること visio は認識というよりは、人間精神の総体的遂行である。脱我において理性的認識が不可能になった後、最も優れた精神の力である知性 intelligentia は愛の眼になっている。脱私の観想は、人間の愛による神自身との一致の経験であり、そこで愛と認識という人間存在の二つの根源的領域は、愛する者としての在り方において一つとなるのである⁴⁴⁾。

4 愛の四つの段階

『小ベニヤミン』の分析を基盤にして、愛が観想へ向けて認識を構成し、完成する在り方を考察してきた我々は、リカルドゥスが重要な小著『力強い愛の四つの段階について *De IV gradibus violentae caritatis*』において描写する神への愛の段階的道行きが、観想論にその枠組みを持つ彼の神学の全体的構想を示していることに気づく⁴⁵⁾。リカルドゥスは神への愛の四段階の内、最初の二段階を次の様に表現する。「第一の段階において、精神は黙想によって [自己自身へと] 入り込み、第二の段階において、精神は観想によって [神へと] 上昇する⁴⁶⁾。」つまり神への愛の四段階の内、第一段階と第二段階は、それぞれ愛によって構成される認識様式である黙想と観想に対応している。黙想は、愛が徳として形成されてはじめて可能になるので、神への愛の第一段階に位置付けられるのである。さて神への愛の第三段階は、神の観想における脱我に対応

43) RICHARD DE SAINT-VICTOR: *Les quatre degrés de la violente charité*, Texte critique avec introduction, traduction et notes publié par GERVAIS DUMEIGE (Textes Philosophiques du Moyen Age 3), Paris 1955, 127-177 (以下 *DQG* と表記): 47, p. 177.

44) *DQG*, 40, p. 169.

45) 愛の四段階の構造の詳細については上掲 HIDEKI NAKAMURA: «*Divinum quemdam affectum induit*», pp. 404-408.を参照。

46) *DQG*, 29, p. 157: In primo intrat meditatione, in secundo ascendit contemplatione, ...

する。「第三の段階において、神の方へ高められた精神は、全面的に神の中へと没入する⁴⁷⁾。」「この状態において外的な事物のすべてを完全に忘れ果てた人間精神が、自己自身を知らないというまでに至り、全面的に神の中へと超えていくというまでに至る時、第三の愛の段階がある。……この状態において精神は自己自身とは異なるものとされる⁴⁸⁾。」重要であるのは、観想の最高段階にある脱我が、神への愛の四段階においては第三段階目に位置付けられるに過ぎないことである。観想は脱我において終わるが、愛は脱我を超え、さらに進もうとする。リカルドゥスは確かに観想の決定的重要性を強調するが、彼にとって人間が最終的に目指すべきものは、観想に尽きてはいない。では愛はさらにどこへ向かうのであろうか。

愛による神との一致を経験することは、観想者の精神に決定的な痕跡を残す。彼は自らの全存在が、一致した愛する者とできる限り同じ在り方となることを望み、その様に愛する者に従おうとする。愛する者に従おうとする道は、ここで具体的に規定されることができる。脱我において観想者が一致したのは、救済史の中で自らが与え尽くす愛そのものであることを示した三位一体の神であるからである。観想者は、脱我から現実の生に再び戻る時に、この神の愛の在り方に自らの世界内の在り方をもって可能な限り従おうとするが、その範となるのは世界内に受肉し、自らが愛そのものであることを示した第二の位格の姿である。

救済史において決定的に与えられた神の愛の内実を、観想者は脱我における神との一致の中で、自らの現実として経験する。神が自らを余すところなく与え尽くす愛そのものであるというこの神体験の総体は、人間の理性的認識とその記憶の力を遙かに超えており、観想者が自らの認識において、観た者についてありのままに想起することはできない⁴⁹⁾。しかし脱我における神との一致の中で、至高の愛そのものに触れた経験は、認識における以上に深い記憶を観想者の愛そのものの内に刻みつけ

47) *DQG*, 29, p. 157: In tertio gradu animus elevatus ad Deum totus transit in ipsum.

48) *DQG*, 38, p. 167: Tertius itaque amoris gradus est quando mens hominis in illam rapitur divini luminis abyssum, ita ut humanus animus in hoc statu exteriori omnium oblitus penitus nesciat seipsum totusque transeat in Deum suum, ... In hoc statu ... mens a seipsa alienatur, ...

49) *BMA*, 4, 22, pp. [118]-[120].

る。この愛に根ざす記憶は、愛した者の姿と可能な限り同じ様に自らを形作ることへと観想者を内的に駆り立てる。愛の第三の段階である脱我において観想者は自己自身を離脱し、「何らかの仕方ですら神の中へと死なされていたが、第四の段階において魂は、いわばキリストの中へと蘇らされている。したがって、第四の段階においてある者は、真実にこう言うことができる。《もはや私が生きているのではない。私の内にキリストが生きているのです（ガラ 2:20）》⁵⁰⁾。」それ故、彼は、キリストの愛の姿に可能な限り参与することを、自己自身の存在の根本規定とするようになる。「これこそキリストの謙遜のかたち *forma humilitatis Christi* であり、完成された愛の最高の段階へと到達しようとする者は誰でも、このかたちに従って自らを形成すべきである⁵¹⁾」。この段階の愛は、人間を、彼がそこに至ることを全存在をもって望んだ神自身からさえも、隣人を愛するために出てゆくよう駆り立てる⁵²⁾。これが愛の最高の段階であり、ここに至ることに愛そのものである神の似像としての人間存在がその世界内的な生の遂行において獲得し得る完全性は存立するのである。リカルドゥスがパウロに従って「新しい被造物 *nova creatura*」と呼ぶこの完全性は⁵³⁾、黙想や観想において特徴的であった霊的上昇の内にはもはやない。それは「自分を無にした（フィリ 2:6）」キリストに従う道として、むしろ下降の内に、霊的へりくだりの内に、キリストに倣って己をむなしくして隣人を愛することの内に存立するのである⁵⁴⁾。「人間は過分さを通して上昇すればするほど、謙遜さを通して下降する様になる⁵⁵⁾。」

50) *DQG*, 44, p. 167: In tertio itaque gradu quodammodo mortificatur in Deum, in quarto quasi resuscitatur in Christum. Qui igitur in quarto gradu est veraciter dicere potest: *Vivo autem, jam non ego, vivit vero in me Christus* (Galat. II).

51) *DQG*, 43, p. 171: Hec est forma humilitatis Christi ad quam conformare se debet quisquis supernum consummatae caritatis gradum attingere volet.

52) *DQG*, 29, p. 157.

53) *DQG*, 45, p. 173.

54) *DQG*, 43, p. 171.

55) *DQG*, 47, p. 177: Quantum ascendit per praesumptionem, tantum descendit per humiliationem. 真の教会共同体は、その構成員がこの霊的下降を実際に生きることで可能になる。この点についての詳細は HIDEKI NAKAMURA: «*Talem vitam agamus, ut Dei lapides esse possimus*» Kirchweihpredigten Richards von Sankt Viktor, in: CLAUDIA STICHER, RALF M. W. STAMMBERGER (hgg.): „*Das Haus Gottes, das seid ihr selbst.*“ Mittelalterliches und

* * *

リカルドゥスにとって、神の観想は、それがどれほど高次のもので、至福直観の或る種の先取りのような在り方を示そうとも、それ自体、人間的生の究極の段階ではない。観想は、むしろ観想者の生が、いっそうの本来性へと導かれるための修練 *exercitium* の道である⁵⁶⁾。この霊的な道の途上において、人間は神が愛そのものであり、自らがまさに愛そのものである存在に愛されていることを見抜く。この愛の認識は、さらに観想者自身が現実の生において常にいっそう愛する者となってゆくよう彼を導く。これこそが神の似像 *imago* として創られた人間の完成の過程に他ならない。リカルドゥスの観想論は、認識の最高の現実化可能性についての単なる理論的な解明ではなく、読者に明確な実存的課題を示す教説であり、観想論を枠組みとする彼の神学は、人間が本来持っている愛という能力を現実化することを通して、その存在の全体性において完成するための指針となることを目指しているのである。

barockes Kirchenverständnis im Spiegel der Kirchweihe (Erudiri Sapientia 6), Berlin 2006, pp. 293-327 を参照。

56) *BMA*, 4, 5, p. [90].